

# 第二章 家族（前半）

## 第二章「家族」を学ぶ狙い

司会…本学習会では、第二章「家族」の前半で出てくる集団婚、血縁家族、プナルア家族、対偶婚に至る歴史的发展について学習します。

今日の家族像を自明の前提とせず、家族は歴史的につくられてきた社会的制度であるというエンゲルスの問題提起を、みなさん、それぞれの疑問や違和感も出し合い、確かめ合える学習会にしていきたいでしょう。

それでは、まずは功刀さん、レポートをお願いします。

功刀…はい。では報告します。

今回扱うのは、モーガンの親族研究をもとにエンゲルスが整理した「家族形態の歴史的发展」です。大きく4段階に分かれて説明されています。

- ① 集団婚
  - ② 血縁家族
  - ③ プナルア家族
  - ④ 対偶婚（単婚への移行段階）
- のうち、③までと④の前半を扱います。

① 集団婚  
男女の集団全体が互いに占有し合う形態。父母の区別はなく、多くの大人が「父」「母」と呼ばれる。エンゲル

スは「嫉妬の余地がない」と説明。

- ② 血縁家族  
世代ごとに婚姻集団が分かれる。親子の性交が初めて禁止される。家族組織の最初の進歩。
- ③ プナルア家族  
兄弟姉妹間の婚姻が禁止される。近親婚の制限が進み、社会的発展が加速。氏族制度（母権制）が成立。

④ 対偶婚  
ゆるやかな一夫一婦制。婚姻関係は排他的ではなく、解消も容易。しかし家族単位が明確化し、父が特定され始める。ここから私有財産意識が芽生え、

## ◆みんなの学習講座



学習する山梨県協の仲間たち

母権制から父権制へ転換する。エンゲルスはこの転換を「女性の世界史的敗北」と呼びました。  
以上が第三章「家族」前半のレポーターです。

**嫉妬は本当になかったのか？**

司会…はい、ありがとうございます。では討論に入りましょう。まずエンゲルスは、「集団婚では、男女集団が互いに占有し合い、嫉妬の余地がない」と言っています。「嫉妬の余地がない」という説明、どう思いますか？

広岡…モーガンっていう人も大したもんだね。この本出るより10年前に家族についてまとめている。モーガンは古代社会における婚姻形態を調べて、家族形態もそれに応じて変化してきたことを明らかにしたってね。エンゲルスは、モーガンの研究を基に、歴史的唯物論の立場から人類の社会的発展を説明したとあるけど、モーガンあつてのエンゲルスだね。

私はここで一番気になったのは、集団婚のところで、「嫉妬の余地を残さない形態」とある。男女関係なく性交してとめどないから嫉妬はないという

けど、嫉妬のない世界なんてあるんだろうか。

坂本…ただ、エンゲルスが言いたいのには、感情がなかったというより、「嫉妬」という概念が成立しないほど婚姻関係が集団的だった」という意味じゃないかと思う。今の私たちの感覚で嫉妬があるかないかを議論しても仕方ない。渡辺…つまり、エンゲルスは感情も社会構造の産物。生産力が低い段階では嫉妬は成立しないということではないですか。

**なぜ財産を子に残すのか？**

古屋…僕が一番疑問なのはここ。なぜ人は自分の財産を子に残そうと思うようになったのか。今まで集団のものだなのに、急に「これは俺のものだ」と思うようになるのは大きな変化だよな。

功刀…エンゲルスは、余剰生産物の発

生を理由に挙げています。家畜や農耕によって、集団で消費しきれない富が生まれた。

**渡辺**…その富はどうやって生まれたか。「家畜の馴致<sup>じゆんち</sup>と畜群の飼育が、それまで予想もされなかった富の源泉を發展させ」と本文にあるように、牧畜、金属加工、機織り、畑地耕作で生産力がぐんと発展したからです。

**広岡**…自分の家畜、自分の所有物について、定義がどつからスタートするかという話だよ。私のもんだよっていつからなったのか。

**古屋**…集団で持っていたものが、自分のものとか、自分が面倒見るのはこの範囲とか変化していく。

**広岡**…私が飼っている牛が何頭とか。功刀…そう、10頭つていうのが、一応自分の受け持ち分だとすればね、それ、私のもんだよってなる。

**小田切**…だから、その私のもんだよってというのは、レポートにあった対偶婚

の中で、家族の形成がある程度はつきりするわけですよ。そうすると、家族で働いたものは家族のものだと。

野蚕の時代は、食べ尽くして終わり。しかし未開の時代に入ると、余剰が生まれる。余剰が生まれると「誰のものか」という意識が生まれる。

**広岡**…余剰生産物の発生が、人間の意識そのものを変えたのではないか。集団所有から家族所有への移行が、家族形態を大きく変えた。

**功刀**…その通り。エンゲルスは「生産力の発展が意識を変える」と説明します。つまり、所有したいという感情も歴史的に形成されたという立場です。

**佐藤**…でも、経済だけで説明できるのか、日本の古代社会は争いが少なかつたという。日本独特のあり方も踏まえて考える必要があるのではないですか。

### 母権制から父権制へ――

### 女性の世界的敗北とは

**佐藤**…女性の「世界的敗北」という表現がありました。これはどういう意味ですか？

**功刀**…家畜や土地などの富が男性の手に集中し、相続権を「自分の子」に残したいという意識が強まった。その結果、母権制から父権制へ転換した。これが女性の地位を大きく下げた、という意味です。

**渡辺**…ここで整理すると――母権制とは父が特定できない社会、それは女性の地位が高い事につながる。

父権制とは父が特定される社会。それは男性が支配的になるという構造変化が起きたわけです。

### 日本史との対応――

### 縄文と弥生はどこに位置、つくづく？

**司会**…では次に、日本史との対応について意見を出してみましょ。縄文や弥生は、エンゲルスの家族形態のどこ

## ◆みんなの学習講座

【学校用教材②】 弥生時代の暮らし



に当たるのか。  
広岡…縄文は採集中心で余剰生産物がほとんどない。だから集団婚、血縁家族の段階に近いんじゃないかと思う。

三内丸山遺跡のように1万年以上も定住していた例もあるけど、基本は「共有」の世界だと思う。

佐藤…縄文人の遺伝子の話もありましたね。協調性の高い「D+M55」が多いという説。自然災害が多い日本で、集団で助け合う性質が育ったという。坂本…ただ、遺伝子の話は慎重に扱うべきだと思う。協調性が遺伝子で決まるというより、環境がそういう行動を促したんじゃないか。自然が豊かで、狩猟採集でも生きていけたから、無理に奪い合う必要がなかった。

渡辺…つまりこういうことですか。縄文時代は採集中心で余剰生産物がないか少ない。よって集団婚、血縁家族に近い。弥生時代は農耕が始まり余剰生産物が生まれる。そこから家族の固定化が始まり対偶婚に近づく、というこのテキストの構造的な家族形態が考えられます。ただ、日本にそのまま当てはめられるのかなあ。

レーニン は嫉妬・恋愛を

どう論じたか？

古屋…「レーニンはどこで嫉妬や恋愛を論じているか」という話がありましたね。僕はまだ特定できていないけど、レーニンは「恋愛の問題は制度では完全に解決しない」という趣旨の発言をしている。

小田切…レーニンは『アンナ・カレーニナ』が好きだったという話もある。恋愛の複雑さをよく理解していたんだろうね。

坂本…レーニンは「上部構造の問題としての感情」に関心があつたと思う。つまり、経済が変われば感情も変わる。しかし恋愛や嫉妬は完全には消えない。渡辺…ここで重要なのは、レーニンが「嫉妬は資本主義の産物だ」とは言わなかった点です。恋愛や嫉妬は、制度の影響を受けつつも、完全には社会構造に還元できない。これはエンゲルス

の「感情も歴史的に変わる」という立場とは少し違う。

佐藤：結局「感情は歴史的に変わるのか、普遍的なのか」という問題に行き着く気がします。

功刀：エンゲルスは「嫉妬は歴史的に変わる」と言う。

坂本：ただ、嫉妬の強さや意味は、歴史によつて変わると思う。例えば、資本主義社会では、独占的な恋愛が強調される。農村社会では、共同体の規範が優先される。だから嫉妬の形は変わるんじゃないか。

渡辺：確かに嫉妬そのものは普遍でもその社会的な意味は歴史的に変わると言うことだ。

## 家族形態の変化と国家形成

### どこが転換点なのか

司会：では、家族形態の変化がどう国家形成につながるのか、この点も議論

しておきましょう。

功刀：対偶婚の段階で家族の個別化が進む。家族単位で財産を持つようになると、氏族全体の共有財産から家族の財産が分離していく。これが私有財産の萌芽になる。

古屋：そして、私有財産が生まれると、それを守る仕組みが必要になる。争いも起きる。そこで「規則」や「権力」が必要になる。これが国家の原型だと思ふ。

坂本：つまり、国家は「財産を守るための装置」として生まれたということですね。エンゲルスの言う「国家は階級対立の産物」という話に繋がる。

渡辺：ここで整理すると――

- ① 余剰生産物が生まれる
- ② 家族単位の財産が生まれる
- ③ 財産をめぐる対立が生まれる
- ④ それを調停する権力が必要になる

- ⑤ 国家が成立する

つまり、家族の変化 ↓ 財産の変化 ↓ 社会構造の変化 ↓ 国家の成立という連鎖があるわけです。

功刀：家族の歴史を学ぶことが、国家の起源を理解することにもつながるんですね。

### 現在の家族像は自然なのか？

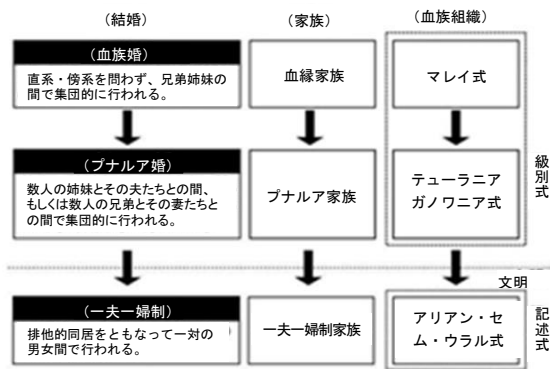
小田切：皆さんの議論を聞いていて思ったのは、私たちが当たり前だと思っている現代の家族像は、実は歴史的に作られたものだということですか。

広岡：そう、今の一夫一婦制・父系家族・相続制度は、歴史の中で形成されたもので、絶対的なものではない。

佐藤：でも、現代の日本では、一夫一婦制が自然だと思われている。だけど歴史を見れば、むしろ例外的なんですよ。

渡辺：その通りです。エンゲルスが強調したのは、「家族は自然ではなく、

# ◆みんなの学習講座



モーガン『古代社会』第三篇「家族観念の発達」

社会の生産力と構造によって変化するという点です。だから、現代の家族像も永遠の形ではなく、変わらうる歴史的産物と考えるべきでしょう。城…とにかく家族の形態が変化してつていうことは、認めなきゃいけない。

## まとめ

功刀…では、まとめに入ります。

1 家族形態は歴史的に変化する

集団婚 ↓ 血縁家族 ↓ ブナルア家族 ↓ 対偶婚。この変化は、生産力の発展と対応している。

2 私有財産の成立は

「意識の変化」を伴う

余剰生産物が生まれると、所有の意識・相続の意識が生まれる。これが父権制の成立につながり、女性の地位が低下した。

3 嫉妬・恋愛感情は

歴史的か普遍的か

エンゲルスは感情も社会構造の産物、レーニン制度では完全に解決しない、と言う。

感情そのものは普遍でも、その社会的意味は歴史的に変化する。

4 日本史との対応

縄文時代は集団婚、血縁家族に近い。

弥生時代は農耕開始 ↓ 家族の固定化 ↓ 対偶婚に近づく。ただし単純な当てはめは避けるべき。

5 家族 ↓ 財産 ↓ 国家

家族形態の変化は、財産の変化 ↓ 社会構造の変化 ↓ 国家の成立へとつながる。

家族史は国家の起源を理解する鍵である。

6 現代の家族像も歴史的産物

一夫一婦制・父系家族・相続制度は自然ではなく、歴史的に形成されたもの。今後変化しうる。

以上が本日の学習会の到達点です。

司会…はい、ありがとうございました。

本日の討論は非常に深まりましたね。家族の歴史を学ぶことが、社会の成り立ちを理解することにつながるということがよくわかりました。

次回は第二章「家族」の後半、単婚家族に進みます。お疲れさまでした。